

平和のバトン

だんだんと8月が近づいてまいりました。8月は6日に広島原爆の日、9日に長崎原爆の日、15日に敗戦記念日と、平和について考える日が続きます。特に最近、教会関係者のご葬儀で、その方が広島原爆を目撃された体験談をお読みしたものですから、なお一層、もう二度とあのような悲劇を繰り返してはならないと思わされます。それなのに、世界ではウクライナの地で、またパレスチナの地で戦争が続いています。こうした戦争を体験された方々の声を私たちがしっかりと受け継いで世界に届けていかなければならないことを思わされます。

せっかく最近、広島原爆を経験された方の目撃談をお読みしましたので、今日は広島原爆について取り上げたいと存じます。今から78年前の1945年8月6日、広島に原子爆弾という恐ろしい爆弾が投下されました。この原子爆弾が恐ろしいのは、一瞬にしておびただしい数の人が無差別に殺されたというだけではありません。放射能によって、その後も長期間にわたり人々が苦しめられたのです。この原子爆弾によって8万人の人が即死し、さらに年末までに6万人の人が死にました。生き残った人々も長い間放射能に苦しめられ、死んでいきました。毎年広島原爆の日に開催される式典で原爆慰霊碑に納められる原爆死没者の名簿には、およそ33万人の方のお名前が記されているそうです。もう一度言いますが、こんな悲劇を二度と繰り返してはならない。本当にそう思います。8月の平和聖日も近い今日、先の戦争をしっかりと振り返って、世界が本当に平和になるように祈りを合わせて参りましょう。

さて、私たちはまた8月6日に広島原爆の日を迎えますが、いつだったでしょうか、日本YMCA同盟というキリスト教団体の機関紙が教会に送られてきて、そこに広島県原爆被害者団体協議会理事長の佐久間邦彦さんという方のお話が載っていました。原子爆弾が生き残った人々のその後の人生も苦しめ続けることがよく分かるお話だと思いますので、ご紹介します。こんなお話です。

「原爆が投下されたとき、私は生後9カ月でした。当時の記憶はまったくないのですが、10歳のころから原因不明の腎臓病や肝臓病を患い、後に被爆者と呼ばれるようになりました。被爆者に対してはさまざまな偏見もあったので、私は苦痛でした。12歳で亡くなられ『原爆の子の像』のモデルになった佐々木禎子さんと年齢も近く、不安もありました。

高校生のとき、広島YMCAの学習塾に通いました。YMCAには塾だけでなくたくさんのサークルがあり、私はコーラス部に入部。コーラス以外にも、街頭募金活動をしたり、平和問題を語り合ったり。キャンプにも行きました。いろんな学校の生徒と、自由に意見を言い合って交流したことは本当に楽しい経験でした。学力によらず一人ひとりが尊重されて平等で、自由で、『民主的とはこういうことだ』と学びました。ちょうど広島YMCAがホノルルYMCAと交流を始めた年でもあり、世界の人たちと仲良くする大切さも教えられました。

20歳になった1964年、どうしても『被爆者』という重圧から逃れたくて上京し、東京YMCAホテル専門学校に入学しました。東京オリンピックにも関わり、就職もして、結婚したいと思う人も見つかったのですが、彼女のご両親が広島の人と交際することを良く思わなかったため断念。やはり私は被爆を背負って生きていくしかないと思って、広島に帰りました。

定年後、広島県原爆被害者団体協議会でボランティアを始め、今に至ります。核兵器は人の一生に対して大きな障壁を作ってしまう、内面まで変えてしまう非人道的な存在です。こんな経験は二度と誰にもさせてはならない、というのが被爆者の思いです。」

一瞬にしておびただしい人を殺すだけでなく、生き残った人も放射能によってしつこく病気にさせて苦しめ、また差別を生み出し、二重にも三重にも苦しめ続ける。原子爆弾、核兵器の恐ろしさがよく分かるお話だと思います。この佐久間さんは2023年の5月に開催されたG7というそれぞれの国のリーダーが集まる会議で、各国のリーダーたちが広島の原爆資料館を見学し、被爆者の話を聞いたのに、その感想で核兵器の悲惨さが書かれていたものの、それで核兵器をなくそうとはならなかったことを非

常に残念に思ったと書いておられます。「日本もアメリカの核兵器で守られている。日本の平和のために核兵器が必要だ」、「核兵器がないと自分の国の安全は守れない」。そのように考える人が多くいるのです。しかしそのような中であって、佐久間さんはYMCAで学んだこととして、話し合いで解決を目指す考え方を強く訴えておられます。考え方の違う相手とも話し合う。交流して理解し合う。戦争はしない。平和はそうした精神によってこそ打ち建てられるのだと主張しておられます。

さらに2017年にハワイの真珠湾に佐久間さんが行かれた時のお話に耳を傾けましょう。真珠湾というのはハワイにあるのですけれども、そこは日本が先の戦争でアメリカに奇襲攻撃を仕掛けたところです。これにより、多くの方が亡くなりました。佐久間さんは2017年にその地を訪れて、ミズーリ号という、太平洋戦争が終わる時に日本が降伏しますという式を行った船があるのですけれども、その船に乗っていた人のお話を聞いたそうです。その中で佐久間さんは、「お互いにやりたくて戦争をしていたわけではない。軍の命令に従わなければならなかっただけだ」という言葉が印象に残ったそうです。戦争をしたいと思っている人は少ない。戦争はしたくないと皆が声をあげることができれば、戦争は回避できる。だからこそ一人ひとりの意見が尊重され、自由に話し合うことのできる民主的な社会を作ること。戦争に異を唱えられる若者を育てることが肝心だと佐久間さんは思ったそうです。

そして最後に、「核兵器は人類にとって、あってはならないものです。……一人ひとりが声をあげていけば、核兵器はなくすことができる。若い方々にはそう伝えたいです」とお話を結んでいました。

今、先の戦争が終結してから79年が経ち、戦争を経験した方が少なくなってきました。しかし、平和はこうした戦争を経験した方々の、二度とこういう悲劇を繰り返してはならないという熱い思いによって守られてきたのです。今、ロシアとウクライナの戦争を目の当たりにしてから、世界がより武器を持とう、軍隊を強くしよう、核兵器で平和を守ろうという考え方に傾いて、結果世界の平和が大きく脅かされていま

す。そのような中で、私たちこれまで戦争を経験してきた方が繋いできた平和のバトンを、しっかりと受け継いでいかなければなりません。その具体的な方法が、一人ひとり声をあげていくことだと思うのです。核兵器はいらない。武器もいらない。軍隊もいらない。話し合いで解決を目指す。その考え方を力強く訴えていきましょう。そして一人ひとりの意見が尊重され、自由に話し合うことのできる社会を守っていきましょう。

今日の聖書箇所、イザヤ書2：1～5には終わりの日に神様が成し遂げてくださる平和についてこのように記されています。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする。 国は国に向かって剣を上げず もはや戦うことを学ばない。」この平和は私たちのこのような行動の先に成し遂げられるものです。神様を先頭に平和のバトンを受け継いで、争いのない平和な世界を皆で一緒に築いていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——